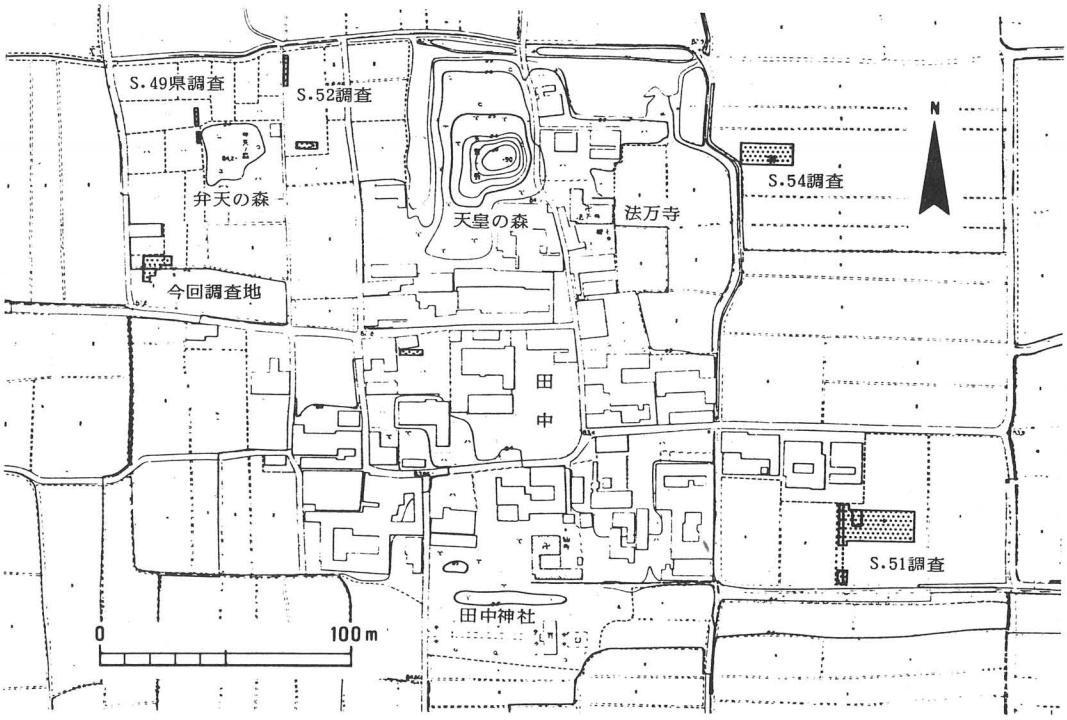
4. 田中宮推定地の調査

（昭和57年９月）

橿原市田中町の集落周辺は，古くから，舒明朝の田中宮跡あるいは田中廃寺と推定されてきた。また，これまでに数次の小規模な調査が実施され，７世紀代の遺構も確認されてきている（位置図参照）。

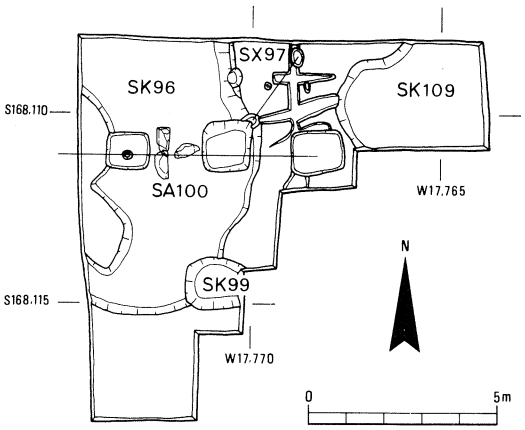
今回の調査は，推定の一つの根拠となっている土壇状の高まり「弁天の森」の西南約40ｍにある畑地と水田とで行なった。調査地の層序は，北半の畑地と南半の水田とでやや異なり，北では，耕土・暗灰褐色土・茶褐色砂質土で，南では，耕土・床土・暗茶褐色砂質土・暗灰褐色粘土となっている。遺構は，それぞれ，茶褐色砂質土，暗灰褐色粘土の上面で検出した。検出した遺構は，７世紀代に属する塀・土壙と，その他，中世に属する土壙・溝・ピットなどとに分けられる。

遺構　７世紀代の遺構は，その重複関係から，掘立柱塀ＳＡ100，土壙ＳＫ99とそれらを削平して掘られた土壙ＳＫ96とに分かれる。ＳＡ100は，調査区中央から



第７図　田中宮推定地周辺調査位置図（１：3000）

西方へのびる東西塀で，２間分を検出した。柱間は2.7ｍ等間に復原でき，ほぼ真東西をさす。柱掘形は一辺１～1.2ｍの隅丸方形を呈し，深さは20㎝である。ＳＫ99は，ＳＡ100の南にある不整方形の土壙で，南北1.5ｍ，東西1.5ｍ以上，深さ約20㎝の規模をもつ。埋土中から，７世紀初頭の土器が出土した。



第８図　調査遺構配置図（１：200）

調査区の西半にある土壙ＳＫ96は，東西４ｍ，南北７ｍ以上の不整形な土壙で，深さ約30㎝である。埋土である暗茶褐色粘質土からは，７世紀初頭～前半代の土器が出土した。

その他，中世ないしはそれ以降に属する遺構として，調査区東半の土壙ＳＫ109や，調査区中央の一辺約30㎝の不整方形の柱穴２個で構成されるＳＸ97などがある。ＳＸ97は，ＳＫ96よりも新しいものの，出土遺物がなく，時期は決めがたい。

出土遺物とまとめ　出土遺物は少ないが，先述した土器類のほかに瓦類がある。瓦類には，田中廃寺出土の１＋６の蓮子をもつ単弁８弁蓮華文軒丸瓦と，偏行唐草文軒平瓦（藤原宮 6641―Ｅ型式）および，丸・平瓦がある。これらの瓦類がいずれも，中世以降の土層から出土し，７世紀代の遺構に含まれていない点は，７世紀代の遺構の性格の一端を示唆するものとして注目される。

今回の調査は，狭小な範囲に限定され，検出した遺構の規模・構造についても，不明な点が多い。しかし，東西塀ＳＡ100は，７世紀前半代に限定される遺構であって，その柱掘形も大きく，ほぼ真東西に営まれるなど，付近に宮殿・官衙に相当する遺構の存在を想定するに充分なものであろう。また，７世紀代の遺構から瓦が出土しない点を考慮すると，これらの遺構が，田中廃寺よりもむしろ，田中宮に密接な関わりをもった遺構とみることができる。今回検出した東西塀ＳＡ100をはじめとする７世紀代の遺構は，昭和50年度に集落の東方で検出した南北塀ＳＡ50，南北棟建物ＳＢ51など（概報６）とともに，田中宮あるいは田中廃寺に推定されるこの地域の遺跡解明の手懸りとなるものである。今後の調査の進展を待ちたい。